

一般の部

入賞作品

広島県知事賞

地球儀を回したのは誰だろう

広島市 高野 和子

地球儀を回したのは誰だろう
脂のついた指あとを残して
夏が逝こうとしていた

白い病室に
ひまわりが一輪まぶしかった
太陽を見ない友の
いらだちのように
黒い頭状の粒々は尖っていた
内臓に散った癌を
ほうたるの乱舞と詠み
短く病んで
そしてあなたは

常しえに消えてしまった

田屋の後ろから

秋がのぞき始めている

家の前からすつと延びている

いっぼんの道は

いつも歩きなれている道なのに

季節のすれちがいに起きる

微妙なフラクシヨンに

空は背のびをしたようだ

日の光が弱くなると

田屋も街路樹も

そして わたしも

やさしく同化してゆく

いっぼんの道は黄に染まり

ぬりかえた絵となって

歩く人のまなざしを深くする

何千の昔から

きつと繰り返されてきたのであろう

自然の不思議な営み

裏山の大きな岩が
ぬらりと光って見えるのは
きつと 張りついたままの
旅人の魂かも知れない

一握りほどの集落に
元気な産声があがった
つる婆さんの二番目のひ孫である
赤子は昼も夜も
線香花火のように泣いている

地球儀を回したのは誰だろう

現 代 詩 部 門

広島県議会議長賞

冬の思念

—— 独楽こまに

広島市 富松 義典

張りつめた氷のように

いっしんに澄む

けんめいに

昇華しようとするが

とつぜん

めまいにおそわれて

一瞬

おもてを伏せる

背後から

らせん階段を降りてくる

かすかなものの気配に

ゆえもなくおびえて

叫びたくなる声を

必死に抑えながら

小きざみにふるえる肩を

自分自身で抱きしめている

しだいに

傾いてゆく風景の中

モノクロームの思い出の

光と影のラッシュにもまれ

不覚にもよろめきながら

やがて音もなく倒れこんで

安息の地平に

思わず口づけしそうになる

冬ざれの

小さな廃園の片隅で

ひそやかに寒椿の花が一輪

ぼとりと落ちる

とおい幻聴の時刻――

ゆっくり

溶けはじめた

独楽の哀しみも

また

凍る

広島県教育委員会賞

やまと村

倉敷市 坂本 遊

偶然にも

この国の異称をもつ 高原の村
やまとで

祖母は生まれ

九十六歳の長寿を全うした

上下のふくらんだ瞼が

土偶のようにまるく閉じられ

我が家の遺伝的特徴が浮かんでいる

曾祖母も その母も

そのまた母も

やはり同じ瞼のかたちをして

古代の眠りについたのでろう

おそらく 私の母も

私も 娘たちも

同じ瞼のかたちをして

眠るのでろう

万葉とたわむれる 花の季節
幼な心は

やまとの野山に染まり

空高く駆け登り

藍色の雲海が村をつつむ

夏の夜明け

高天原に芽生えた恋は

天上の契りを結んだことだろう

ふたつの大きな戦争に追われ

幼な子の手をひいて

秋の 山深いけもの道を

おおらかに走り抜けてきた

冬の夜 降り積もる雪で

やわらかな要塞となる村

祖母の晩年はそのように守られた

ごはん食べていかれ

泊まっていかれ

顔も名前も思い出せない人に

命を養うことばだけは
最後まで忘れず

淡い紫の花が散る
うつし世の衣をほどこき
私は 私のやまとを湯灌した
魂が脱ぎ捨てた体は
砂丘に描かれた風紋のように
黄金色の無数の皺を残し
潰えたばかりの大地のようだ
祖母は村の土にかえっていった
母や 私や 娘たちの臉に
消えないやまとを残して

大和村は現在の岡山県賀陽町。古くから高原
の村として知られる。昭和三十年、合併により
地名は消えたが、呼び名だけは今も地元に残る。

けんみん文化祭ひろしま実行委員会会長賞

夕焼け

安芸郡府中町 伊達 悦子

いま

私が見ている夕焼けは

地球の反対側では朝焼けかもしれない

バスシートの窓際にうずもれ

ななめに見上げる きょうの一日

手の甲にボールペンのメモ書き

にじんで消えかかる

忘れてはいけないこと

つま先の痛みが覚えている はっきり

暮れていく働いた街

あかね色の橋げた

あかね色の原付バイク

あかね色の二の腕

あかね色のキッチンで

おかえりなさい の文字を

からから かきまぜて

飲み干す末っ子

夕飯の献立を巡らせながら
ステップを降りる

いまごろ

ブラインドを上げて

ばら色の空に目を細めた 異国語の母親が
卵とベーコンの朝食を準備している

広島市長賞

たずね人

広島市 吉岡 靖子

人を捜しています

身長 不明

体重 不明

性別 不明

別れた場所 銀行の前の石段

日時 昭和二十年八月六日午前八時十

五分

状況 晴れた空に戦闘機が飛来

原子爆弾を投下

辺りは一瞬に崩壊

私は銀行の前の石段にいた人の影です

あなたを失って動けなくなりました

あなたを待ちました

人が日傘をさして足早に歩む日も

降り積もった雪で人がすべって転ぶ日も

なくした影を求めてさ迷っていらっしやるの

ではと

ある時

私は石段ごと資料館に移動することになり

新聞記者が取材して行きました

テレビ局の人が得体の知れない影を映して行

きました

会うことができたら

後を歩いたり前を歩いたり立ち止まったり

いつも一緒にいることができる

六十三年間 あなたを捜しています

ご存知の方はご連絡をお願いいたします

連絡先 広島市中区中島町一番二号

広島平和記念館内

石段の影 宛

広島市議会議長賞

不思議な時間

東広島市 下田 和子

蒸し暑い寝苦しさに目が覚める
首の辺りを拭いつつ
どの方向に覚めたやら
いつもの位置をつかめぬまま
安定のない時を漂う

ほの暗い窓の在処を見つけると
古びたナビは精一杯
現在位置をおしはかり
眠った脳を揺り起こし
安定感をとりもどす

眠りに入るその前に
やっと見つけたあの言葉
思い出すなど出来なくても

風を感じる記憶がすこし
ほんの少しよみがえる

部屋のドアを開け放ち
風の道をつくったこと
微かにすこしよみがえる

昨日の自分と
今日の自分が
繋がっていく
不思議な時間

広島市教育委員会賞

恐竜の声が聞きたくて

広島市 松本 賀久子

恐竜の声が聞きたくなかった

どうしようもなく 疲れてしまった夕暮れ

恐竜の声が聞きたかった

同じミスばかりを繰り返して 職場で

まるで 私が

「いなくてもいい人」でもあるかのように

叱られて 叱られた時

恐竜の声が聞きたかった

上司の怒声よりも

戸惑っているお客様の声に 涙がこぼれて

石を蹴飛ばしながら

うう と顎の辺りに痛みを押し込んで

歪んだ顔のまま

いつもは通らない河岸の 暗がりを

一人歩いて 帰った時

どんなに

古生物学が進歩しても

恐竜の鳴き声と 身体の色 だけは

どうしても分らない ものらしい

私が それを尋ねた先生は

マアそのうちに

科学者の先生方が

タイムマシンを作ってくれるでしょうと
言って おどけた

ティラノサウルス

君の雄叫びは どんなに響いていたのだろう

ブロントザウルス

どんな声で君は 愛を囁いたのかな

トリケラトプス

草食恐竜だけど

立派な 角のある君は

どんな 叫び声で 吼えて

自分の領土を宣言したのか

タイムマシン が出来るまでは
生きている事も出来そうにない 私

決して聞く事のない

恐竜の叫びを 心の奥で微かな音に聞く
まるで

モノクロ映画の

ぎこちない動きをする恐竜の声を

恐ろしく古いテレビの前で

幼稚園の子供に還って

座り込んで 目を見開いて

聞いてでもいるかのように

恐竜の音が聞きたくて

博物館で 触れてはいけない骨格の標本に

そっと 手を伸ばした事もある

まあ 一億五千万年でも生きてから

悩んでみるよ

ふいっと 風が 耳に

吹き込んで来るように

聞こえて来た 誰からなのかは分からない

恐竜の

つぶやき

現 代 詩 部 門

財団法人ひろしま文化振興財団会長賞

「反戦」の詩^{うた}

大竹市 正本 忠臣

ジープが止まる
空に 発砲音が広がる
音は乾いて リズムのように共鳴し
トンビが 羽を
精いっぱい広げて 舞い
ゆつくりと旋回しながら 下って来る
トンビの羽は
広がったままで 固い
引きずって行って ジープに投げると
駄菓子を投げ返してくる
菓子は銀紙に包まれているから
色とりどりに 頭上を越えて
散って行く
土ぼこりの立つ道へ
女の子は布の人形を抱いて 歩み出た
軍用トラックは

急ブレーキを掛けて 激しく軋み
飛び上がって 止まった

手に人形を持ったまま 女の子は

トラックの前に 立っていた

街が沈黙していた

兵士の罵声と

トラックのドアを叩く音が

和音となって

格子戸の街に 静かに流れていく

縦列に停止していたトラックの群れは

前進するため

再びエンジンを掛ける

音は順々に 低い方の音階に加わり

街に大合奏になった

夜中から 地面に座り込んだ

少しだけ夜明けが近づくと

街路樹も ビルも

陸橋も 淡い青色に包まれる

歩道の霜は 一面に青く燃えていた

寒かったので

同じ毛布の中の人と

背中をこすり合わせて 待機した
街が明るくなる

人々は 兵士達のように
隊列を組んで歩いた

同じ言葉を

指令通りに繰り返した

敵がどこにいるのか 分からなかったから
前の人の靴の

歩く度に パカパカと口を開ける

踵に向かって

「反戦」を叫んだ

だから

空を 舞いながら下りてきたトンビも

抗って 溝に投げ捨てられた青年も

静かな和音といっしょに

淡い夕日の中に

幻影となって 浮かんだままにいる